
[連載挑戦作品] 勝負はこれから……？

帰宅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「連載挑戦作品」 勝負はこれから……？

【Nコード】

N6754S

【作者名】

帰宅

【あらすじ】

一族の娘の元へ月に一度来る通称「お客さん」。幽霊だったり妖怪だったり来る人種（？）は様々だったが、一族の次期当主と見込まれている真砂の場合は実の孫（予定）で！？「祖母ちゃん、まだ若いんだから祖父ちゃんだけじゃなくたくさん恋人作りなよ」「……………生まれなくなったらどうする」 16歳にして孫（予定）を持ってしまった主人公が送るほんのり祖母生活（な予定）。

「祖母ちゃん、オレがツいてるからな！」

古くから高い靈力を誇る巫女を輩出してきた一族の娘たちには毎月一度、「お客さん」と呼ぶ存在がやって来る。

その存在は幽霊だったり妖怪だったり様々な人種（？）だったが、中でも一族の次期当主と見込まれている真砂の場合は血縁の者が訪れていた。

しかもそれはきょうだい（兄弟）ではなく祖先でもなく、何とこれから生まれる予定の孫息子であったため、さすが次期当主へ見込まれた存在よと評判が高まる反面、やはりあれは異質な娘だと異端視についても拍車がかかった。

「だから自分は大丈夫って？ 頼むよ祖母ちゃん、オレ確かに今ツいてるけどさ、靈力自体は大したことないんだって」

「じゃがまだ生んでおらぬとはいえやはりそなたの祖母じゃからのう。孫の前で無様な真似など出来まい」

それ、と自身に声を掛けるなり真砂はすつくと立ち上がり、

「しょーがねーな！。祖母ちゃん、オレ何も出来ねーけどさ、でも居られる限り側に居るからな！」

常人には見えない孫（予定）はやはり常人には見えない手で効果音を付けたくなるほどその背を豪快に張り倒した。

この作品はこんな二人が「何でこんなに可愛いのかよ」な関係になるまでの過程を描いたほのぼの祖母孫生活応援作品……で、す？

「やっぱ祖母ちゃんは祖母ちゃんだわ」

その声に気が付いたのは中学生の頃だった。
自分を喚ぶ声。

それは遠く、深く、ほのかなもので、当時の真砂には到底掴み切れなかった。

けれど月を重ね年を経ると共にその声は近く、寄り、明確なものへとなってきたため、高校へ入る辺りにはその声の主が「彼」であり、ひいては自分の孫であることも分かっていった。

「……そうは言っても16で孫を持つ事態になったわけだろ」

「そうじゃのう」

おっとりとした微笑む真砂の姿にありし日の祖母の姿が重なって――。

「やっぱ祖母ちゃんも祖母ちゃんだわ」

孫（予定）は遠い未来と同じやりとりを繰り返したのだった。

「……ああ見えて祖父ちゃん、実は苦勞してたりしてな」

一族の娘の元へは毎月一度、「お客さん」が来る。

それは生き霊だったり幽霊だったり、妖怪だったり悪魔だったり、時には妖精もいたりして、その人種(?)は様々だ。

けれど分類するとしたら、その種類は二種類しかない。

一族の娘が生前に「お客さん」の世話を受け代わりに「お客さん」の面倒を見るか、あるいは死後に「お客さん」の世話を焼き続けるか。突き詰めていけばこの二種類しかない。

そのため「お客さん」が血縁者である場合、兄弟や祖先――対象となる一族の娘より過去に人生を終えた人物はあっても弟妹、子供、ましてや孫などという一族の娘より未来を生きる存在はあり得る――。

「あり得ちゃったんだよなあ」

「そうじゃのう」

相槌を打つと真砂はごろりと寝転んだ。

広がり乱れる髪も着物の裾も気にならず、ただかの名女優が舞台で長年披露し続けた前転のように、あるいは以前目の前の孫息子(予定)が背を叩いた時と同じように豪快に。

「……祖母ちゃん」

「何じゃ」

「祖父ちゃんだけじゃなくたくさん恋人作れって言ったオレが言うのも難だけどさ、それでもやつぱり――」

慎重ってやつは大事だと思うぜ、どんな時代で誰(身内)の前であつても。

そう言つと自分らしくないなあ、と思いつつも礼儀正しく孫息子(予定)は白く光る祖母(16歳)の太ももからできる限り自然に視線を逸らし、心の中で大きいため息を吐いた。

「……ああ見えて祖父ちゃん、実は苦勞してたりしてな」

「知らぬわ」

しかし、まだ出会ってもおらぬしのう、そう答えながら口を尖らせた真砂は真砂で孫（予定）から見えない影でこっそり舌を出しているものだから、孫（予定）の指摘は案外正しいのかもしれないかった。

「祖母ちゃん、そいつちゃんと捨てたんだろうな？」

そもそも真砂の言う通り、彼女は夫に出会ってさえいなかった。

何しろ夫である孫息子（予定）の祖父との出会いは卒論の関係で祖父が真砂の兄の家、つまり真砂の家へ訪れたことがきっかけだったが、真砂の兄は現在大学三年生。すなわち祖父もまだ三年生と機が熟していないのだ。

「あと一年だな」

「そうじゃのう」

大体孫（予定）の語る出会った当時のように大学生と高校生では学生同士。知り合うだけならともかく急かしたところでどうしようもない。

いくら片方が成人しているとはいえ、いやだからこそ親しくなりすぎるのは常識的に見ると良いとは言い難いのだ。

「えらい婉曲だな」

「人にはそれぞれ事情があるからのう」

確かにこの場合、女の側には保護者の同意が必要とはいえ、共に結婚ができる年齢には達していた。

学校についてはある意味究極といえようが、退学するという手段もあるだろう。

当分の間周囲からあらぬ注目を浴び続けるだろうが、社会に出ればその時点で社会人。

年齢的に男は仕事に、女は家計に集中し、安定した生活の維持へと励まざるをえない。

年齢よりも自立を重んじられる。

それこそが保護者に守られた学生という身分を捨て、社会へ出るということ。

「らしいぞ」

「……やけに実感こもってるけど、もしかしてこの前雨降った時に

通りがかった電柱の前で立ち止まって一人で相槌打ってたアレか？」
「うむ」

引きつる孫息子（予定）へ真砂は重々しくうなずいた。

雨が雷を通すことは知られているが、ついでに霊力も通しやすくすることを孫（予定）も知っていた。

祖母の血が隔世遺伝したらしく、孫（予定）にも彼女ほどの霊力はないものの見えることは見えていたのだ。

そのため上記の件も実体験から知ってはいたが、同時に今祖母とあるこの過去では見えなくなっていたため、実際に聞いて確認するまではわからなかった。

自分のいる現在へ体を置いてきたからだろうな、と孫息子（予定）は考え、同時に祖母である真砂も孫息子（予定）の考えている姿に確信していた。

一つは一族の娘は未来を垣間見ることは出来ても干渉は出来ないということ。

孫（予定）が彼における過去の時点で過干渉を許されず一時的に見えなくなっていることだ。

もう一つは一族の将来。

一族の次期当主として既に深く関わっている真砂には一族を守る義務がある。

少子化という社会の流れは一族も例外ではなく、一族の出生数は近年下がっていた。

加えて生まれてくる娘たちの霊力も落ちたもので、自分は当代：

…いや、一族最後の巫女であることも真砂には分かっていた。

かつては高い霊力を誇る巫女を輩出してきた一族だったが、現在は全盛期の三分の一しかない。

そのほとんどを真砂が支えていると言っても過言ではないため、ひそかに一族の衰退を憂い、孫（予定）の訪れにも実は理由の中に生活苦も含まれていたのではないかと心配していたのだが、人の意見をこれだけ素直に取り入れられるということは杞憂であったのだ。

ろう。

安心した真砂はそつと胸を押さえながら遠い未来の一族の安寧を祈っていた。

「ところでさ、結局そいつ何だったわけ？」

「おお。何でも死亡した事故現場に奥方が煙草を備えたそうじゃが、その煙草が愛用の品と違っていたため、心残りで出てきてしまったらしい。奥方へはきちんと伝えておいたゆえな、もう心配はいらぬぞ」

何でもたまたま店で売り切れていたため、やむを得なかったそうじゃ。

煙草というものは人気があるものなのじゃのう、と頷く祖母へ孫（予定）は嫌な予感を抱えながら聞き出した。

「なら祖母ちゃん、そいつちゃんと捨てたんだろぅな？」

実はその辺に居たりしねーよな、居ても今オレわかんねーぞ。

ていうか確かに祖父ちゃんだけじゃなくたくさん恋人作れって言ったけど、それは生きてる人間が前提だし、何より不倫や愛人になるなんて絶対認めねーかな！

孫（予定）にしてみれば鼻息荒く問いただしたところを精一杯押さえた物言いだつたが、案の定祖母は何もわかっておらず、

「安心せい、そもそも拾ってなどおらぬ」

子供のように胸を張った姿に盛大につっこむはめになったのでした。「全つつ然分かってねーじゃねーか！！」

本当にオレこういうキャラじゃねーのに、と嘆きつつ、

「祖母ちゃんは女としての危機感も足りねー！！」

「何おう、身の安全には常に注意しておると言うておろぅが」
雷を落とす孫（予定）に反論する祖母。

こうして遠い未来と同じやりとりを繰り返す、懲りない二人なのでした。

「祖母ちゃんの言う興味はないけど気にはなる」

さて、世の女性たちが「お客さん」と暗喩する別の「お客さん」と同様に孫息子（予定）の訪れは時に不定期になった。

それは定期的であつたり前兆がくる場合もあつたが、同時に不定期な時期もあつたため、孫息子（予定）にも心配していることがあつた。

「祖母ちゃん、いつ来てもオレのこと迎えてくれるけどさ、何かねーの」

ホラ、仕事じゃなくてさ、自分の用事っていうかさ、と本人ももどかしく思っているであろう物言いは当然真砂には伝わらず、

「何じゃ。常々思つておつたが、はつきり言いや」

実はこちら結構鬱憤が溜まつていた祖母に一喝され、孫息子（予定）は「親の心子知らず」ならぬ「孫の心祖母知らず」と嘆くのを止め、一転攻めの姿勢へうつて出た。

「ならそうさせてもらうけどさ、祖母ちゃんいつもオレのこと待つてくれるけど、誰かいねーの？ たまにはさ、トモダチとかさ」

そう、孫（予定）が気にしていたのはこのことだった。

一族の仕事は真砂が次期当主であるため、いくらでも都合をつけられる。だが友人関連ともなればそうはいかない。

大人の世界で慣らされた祖母はともかく、思春期であるからには突然約束をキャンセルさせられたりしたら、しかもそれが何度も続くようならば少しくらいはこじれるのではないか。

というか、それがフツーだろ！？ と正直肩をゆさぶつてでも問い詰めたところだが、相手は女性、しかも祖母。

フェミニズムと身内意識とこの過去においては滑稽なものとなつてしまっている現16歳の未来の祖母への敬老精神とが重なって、自分でもわけがわからない状態と化していた。

未来においての祖母には友達と呼べる人がいた。だが同居してい

ない人間が身内とはいえどれだけ交友関係を把握しているものか。

「ご多分に漏れず孫息子（予定）もその存在は知っていたが、肝心な相手の名前や出会った時期までは把握していなかった。」

「こーゆーのはオレじゃなくて別の孫である孫娘（予定）の方が詳しくんだよな。」

「聞いたときやよかったと内心で反省しながらも孫息子（予定）は言葉が続けた。」

「仕事だけじゃなくてさ。何つーか、自分の用事っていうか、ねーの？ そーゆーの」

「実はないものの頼杖をついて孫（予定）は言った。」

「突然来る時だってあんじゃん。オレ。まあ自分で調整できない以上オレにはどうしようもないわけだからそこは勘弁して欲しいんだけど。でもオレが来たことで特に誰かにフォロー入れてる様子見えねーし。そりゃ電磁波がどーの言われて携帯持たされねーのは知ってるけど」

「でも祖母ちゃんならいくらでも方法あるよな？」

「などと孫息子（予定）が指摘する通り、確かに真砂なら陰陽師のように式紙を打つなどの方法がいくらでもある。」

「イヤだ、おばーちゃんはおクの！！ と主張をする年齢ではないため、身内としてはこういう心配が出てくるのだ。」

「何と。興味があるのか」

「いや、祖母ちゃんの言う興味はないけど気にはなる。で、いんの？ トモダチ」

「おるぞ。高校へ入って一人増えた」

「今では自分を含め四人で行動しておる。」

「そう答えた祖母の顔には高校生らしい歳相応のほころびがあつて、祖母ちゃん大事にしてるしされてんだな、と思いつながら自分も未来の実年齢に相応の表情を浮かべていることには気が付かない孫息子（予定）だった。」

閑話 その1 「孫息子、ねえ……」 (前書き)

友達その2 しづか

閑話 その1 「孫息子、ねえ……」

上質の鈴の音を聞いている気分になる。

自分という人間をどう思う？

唐突に問いかけられたしづかがゆつくりとまばたきを一つ置き、出した答えがこれだった。

真砂という存在を語る時は常に舞い落ちる花びらと鈴の音がセツトになって脳裏へ浮かぶ。

実際には一度としてそんな姿を見たことなどないが、それでも腰を過ぎるほどに伸ばした長い髪、大きな祭などで着用するような格の高い巫女の衣装、馥郁としたお神酒の香り、一面に舞う花びら、鳴り響く鈴の音――。

「この国の文人墨客が想像したであろう桃源郷とはこういうところか。そんなことを連想させる存在。それが私にとっての真砂だよ」

そう言ってしづかはさりと微笑んだ。

「いやに持ち上げるのう」

「そりゃあ？ 珍しくアンタの機嫌のいい顔が見られたからね」

わざわざ悪くすることないだろ？ などと憎まれ口を叩きつつもしづかは優しく真砂を見守っている。

「何と。それほど普段機嫌が悪いか？」

「悪かあないけど、だからっていい顔をあからさまに見せることもあんまりないからねえ」

よっぽど嬉しかったんだろ？ 良かったじゃないか。

しづかはそう言い、ひょいと腰を上げると片手を上げ、そのまま去って行った。

「孫息子、ねえ……」

一瞬、何もない天井をちらりとにらみ、

「――やっべ」

という聞こえない声を聞いたかのようにニヤリと微笑んでから。

実際、「お客さん」として次の月に訪れた孫（予定）は何故か無茶をしたらしく、

「どうしたのじゃ」

「放つといてくれ……」

彼の体はいつになく淡く透きとおっていた。

閑話 その1 「どこのどなたか存じませんが、考えさせていただきます」

友達その1 ときこ

閑話 その1 「どのどなたか存じませんが、考えさせていただきます」

山登りの途中で見つけた湧き水。

自分という人間をどう思う？

真砂から突然問いかけられたときが一瞬考え、出した答えがこれだった。

「ほう。湧き水か」

「だってあなたときたらいきなり尋ねてくるのですもの」

しようなない方、と困惑しながらも真砂の唐突さに慣れたときこそそのまま言葉を続けた。

「でも結構いい線を超えたと思いませんこと」

湧き水の温度は山を登り火照った体の熱をほどよく冷まし、透明な色は目を癒やし、水は乾いた喉を潤す。

「ね？」

くすくすと笑うときこは自分の答えに満足していた。

「あなたのそんな表情まで拝見できましたもの」

どのどなたか存じませんが、その妙な吹き込みに感謝いたしますわ。

「――今回は、ね」

そう言い残すとこれまた珍しく眉をしかめて考えだした真砂を残し、颯爽と去って行った。

「本当に……どのどなたか存じませんが、真砂さんにこれ以上妙なことを吹き込もうものなら、私としてもいくつか考えさせていただきますわ」

きりりと結んだ決意を残して。

「――ウソだろ？」

その後蒼白になった誰かのつぶやきなど誰も知らないまま日にちが流れ月が変わり、

「湧き水か……」

「考えて一体……」

などと口に出す言葉は違えど互いに知らない内に同じ人物の発言に
悩む祖母孫（予定）コンビがあつたのでした。

閑話 その1 「忘れないで」(前書き)

友達その3 彼女

閑話 その1 「忘れないで」

そこにいると思っていたのに、気が付いた時にはいなくなっている人。

自分という人間をどう思う？

真砂から突然問いかけられた彼女が考え、困惑の中答えられるまでじっと見続けられるというプレッシャーにさらされながら捻り出した答えがこれだった。

「いなくなっておるか？」

自分にしては心当たりのないため真砂が思わず聞き返すと、そんなことはないけれど、と頭を振ってから

「イメージってことでしょう？」

彼女は律儀に会話を続けた。

「花吹雪っていうか、雪解けっていうか」

その時は確かにその場にあって、また見られると思って通りすぎると次に来た時には跡形もない。

「……みたいなの」

「ごめんね、あんまりうまく言えない。」

困惑の中落ち込む彼女へ真砂はそつと手を伸ばした。

「ありがとう」

そうほんわりと微笑む彼女に真砂の頬もほんのり緩んだ。

「ときこさんとしづかちゃんは何て言ったの」

もう聞いたんでしょう？ 良かったら私にも教えて、そう聞く彼女へ二人の答えを返すと、

「桃源郷に湧き水があ」

「どう思う？」

彼女は笑い、当たってるんじゃないかな、と控えめに同意した。

「真砂ちゃんも清らかっていうか、世間離れしてるっていうか。何か違うんだよね」

綺麗な感じで。

だから惹かれる人もいるけれど、反発をする人もいる。
人間って、そんなに綺麗でいられないし。

苦いものを含ませて笑う彼女に真砂はそつと目を伏せた。――見ていられなかった。

そんな真砂をじつと見つめて笑みを消した彼女は口を開いた。

「真砂ちゃん」

「うん？」

「……忘れないで」

いつか話した時のように、真砂ちゃんの霊力はもしかしたら真砂ちゃんには重すぎるもので、苦しんだこともこれから苦しむこともたくさんあるのかもしれないけれど。

「ときこさんも、しづかちゃんも、もちろん私も。ずっと、ずっと真砂ちゃんのこと、大事に思っているからね」

だから忘れないで？

そう言い残すとこれが限界だったのか、先のしづかやときこと同じく、彼女の夢も真砂の手を離れ彼女の元へと還っていった。

「……ありがとう」

ほんに、礼を申す。

そう言って三人の夢の残像へ頭を下げた真砂と、

「――あのヒト、こーゆーヒトだったんだ」

今はまだ遠い未来での予定とはいえ、孫息子という血の絆と真砂自身心が許していることから己の霊力で覗き見ていた誰かを残して。その後、目を覚ました誰かは電話をかけると身支度を整え出かけて行った。

「……………何があつたの？」

と困惑する相手の元へ。

閑話 その2 イトコの絆・前編（前書き）

身内その1 孫娘（予定）

閑話 その2 イトコの絆・前編

「久しぶりです」

「ああ」

本当に久しぶりに会ったイトコは様子が何だか変わっていた。

……と、双方が感じていた。

「どうなさったんです、一体」

言いつのる孫娘（予定）の語感強い。

人付き合いとは何だ？ そんなものは単なる弱者の馴れ合いにすぎないだろう、と鼻でせせら笑っていきそうな傲慢な従兄弟が疎遠だった自分に朝方突然電話を掛けてくるなり今から家を訪ねるから時間を作れと要求してくるのだから当然の反応といえよう。世間的には。

ただ最も自分が外れているくせに他人には常識の範囲内での言動を求めてくる男には全く通じていなかったため、

「変わったな」

以前はもつと臆病だったのに、という明らかに胸の内に秘め、なおかつ放っておいて欲しい感想を率直に述べられてしまった孫娘（予定）はひきつる頬を元へ戻すべく最大限努力しながら、

「今だけですから」

それもあなただけ、という毒を吐き、ちょっぴり溜飲を下げたりもしながら会話を続けるべく我慢をし続けていた。

「言うようになったな」

「お祖母さまに関わるんですから」

きっぱりと言い切ると孫娘（予定）は孫息子（予定）の目を見据え、舌鋒鋭く口火を切った。

「それで、今まであれだけお祖父さま贔屓でいらしてお祖母さまとは全く疎遠であつたあなたが一体何の御用があるというのです」

今更だということはわかりきっているのでしょうか？ と孫娘（予

定）はたたみかけ、

「なのにこうして私を呼び出してお祖母さまの話をなさろうとするわけですから、さぞ大事な用件なのでしょう。もったいぶってないで早く話して下さい」

一気に言い切るとテーブルの端へ寄せたグラスを掴み取り中身を一気に飲み干した。

「じゃあ聞くが、

」

「何でしょう」

「お前、オレの名前がわかるか？」

「はい！？」

孫娘（予定）は思わず孫息子（予定）の顔を凝視してしまった。

本当に、何を言い出すのだこの男は。

「いいから言ってみろよ。オレが誰か」

「そんなのっ」

頭に來た孫娘（予定）が孫息子（予定）の名前を呼びつけた瞬間、

「でしようっ、……………え？」

孫息子（予定）の名前が出てこないことに孫娘（予定）は恐れおののいた。

閑話 その2 イトコの絆・中編（前書き）

身内その1 孫娘（予定）

閑話 その2 イトコの絆・中編

「そんな……………っ、……………っ」

脳内には確かに浮かび、声にも出しているはずなのにどうしても孫息子（予定）の名前が音にできなかった。

しかし孫息子（予定）と同じく一族の霊力を受け継ぎ、かつ今では当主である祖母の近くへ誰よりもいる存在でもあった彼女には慣れた事態であつたため、

「あなたね」

と即座に原因を見破った。

「何をしたのです、いいえ、何をするつもりなのです」

名前が機能しなくなるということは当人の消滅を意味する。

男が時間に……………というか過去に手を出したことを悟った女は従兄弟に考え直させるべく、まずその真意を探り始めた。

「過去に干渉するなど、お祖母さまでさえ滅多にされないことなのです。あなたもいくばくかの霊力をお持ちとはいえ、こうして存在そのものが揺らいでいるじゃありませんか」

この上何をするおつもりなのです。事と次第によってはまず私がお相手いたしますよ、と霊力の高さなら従兄弟を上回る彼女は迷うことなく上着の隠しポケットに手を入れ、自身の護身用として身につけているお札を取り出し掲げて見せた。

すると黙っていた男が口を開き……………。

「なあ、お前自分が生まれてこなきゃって考えたことあるか」

瞬間、室内に閃光が満ちた。

封じ込めた雷で攻撃をするお札を発動させてしまった孫娘（予定）が動かしたものの孫息子（予定）へ当てるわけにもいかず、威力を落とした結果光だけが残り、部屋を満たした。

「あな……………あなた、いきなり何を……………」

しかし丸腰の相手へお札の術を発動させてしまった孫娘（予定）

にも言い分はあった。

高かれ低かれ霊力というものを持った人間が考えないことのない問題だからだ。――自分も含めて。

霊力がなければ、普通の子供に生まれれば、自分さえ生まれなければ――と。

だからこそ祖母を頼って彼女の元へ来た、孫娘として大事に扱われ、当主である祖母の側近くへ置いてもらえてどんなに……だろう？ 男はそうつぶやくと窓の外へ視線を移した。

「オレもだ。お前たちにどう見えていようが、オレだって……」

それなりに、とささやく姿は本当に消えてしまいそうで、

「……だからですか？」

と冷静さを取り戻した孫娘（予定）は二枚目のお札を取り出し再び構えた。

閑話 その2 イトコの絆・後編（前書き）

身内その1 孫娘（予定）

閑話 その2 イトコの絆・後編

「だから自分の存在を消そうとしているのですか？　自分が生まれてこない方がいい、自分さえ生まれなければ、と」

孫娘（予定）はすう、と息を吸うと思い切り吐き出してから

「馬鹿ですか」

と吐き捨てた。

「あなたにとってはそう思うのかもしれませんが、お祖母さまにとってのあなたは大事な孫息子なのです。消滅などさせるわけにはいきません。そのような気など二度と起こさないようにしてさしあげますから覚悟を決めて下さい」

言うが早いかお札を動かし、巻き起こされた突風で孫息子（予定）は壁に叩きつけられた…… かに見えたが、風は逸れ、悠々と孫息子（予定）は窓に近寄り、

「お前が成長していて良かったよ。悪いがオレはオレの道に行く。邪魔が出来るものならやってみろ」

じゃあな、という捨てぜりふを残して窓から外へ去って行った。

「……何がじゃあな、よ」

残った孫娘（予定）は自分の作った突風で壁紙は剥がれ内壁も崩れ姿を現した断熱材…… にもたれかかる積み上げてしまった家具の山といっためちゃくちゃになった室内の惨状に頭を痛めると共に、祖母へどう報告するかという難題に加え、おそらく自分がこの件の担当にさせられるんだろいうなあ、という予感に頭を痛めながら、

「……変わるんじゃないわよ、馬鹿」

という悪態をいっそあのまま傲慢でいて欲しかった従兄弟へささやかに吐いた。

「おーい、釣るぞー」

庭からかすかな水音がするので確認をしに行ってみると、池の底に祖母が沈んでいました。

あなたはどうしますか？

……という状況へ今まさに置かれてしまった孫（予定）は取りあえずしゃがみこみ、祖母の顔が映る水面に話しかけた。

「おーい、釣るぞー」

釣り竿も釣り糸も釣り針も無い状態でナニ言っただ、と自分自身へつつこみながらも最初に浮かんだのはこの言葉だったから仕方がない。

「おーい。祖母ちゃん」

鯉や金魚でも育てていたら反応ちげーのかねー、などと頬杖をつきながら適当に呼んでいると、声に反応したのか、閉じていた瞼を開けて真砂が底から浮かんできた。

が。

水面から顔を出しとろりとした目つきで天を仰ぎながらまばたきを繰り返した挙げ句発した第一声がこの通り。

「……月」

「おう」

さては昼間から沈んでいたな、一体どれだけ沈んでいたんだと呆れかえった孫息子（予定）は、

「……月は有明」

「……そうだな。東の山ぎはにほそくて出るほどいとあはれなり、だ」

まあ有明……夜明けにや早すぎるからな、取りあえず上がるーぜ、となぜか枕草子の一節で応酬を交わしながら手を差し伸べて、真砂を池から引っ張り上げた。

「何か拭くモンは。それとも自分で出す？ オレ持ってくっけど」

「構わぬ」

今乾かす。

そう宣言するなり繋いだままだった孫息子（予定）の手を離すと、文字通り塗れ鼠であった真砂の姿は一気に乾いた状態へと早変わりした。

「……お見事」

歌舞伎役者もかなわぬであろう鮮やかな術に思わず拍手のまねをする孫息子（予定）だったが、そもそも孫息子（予定）は池の底から真砂を呼び出すために来たわけではなく。

付いて参れ。

同じくそれを知る真砂は目線で孫息子（予定）に促すと手早く足の裏に着いた砂を払い、またも術で呼び出した草履を履いて自室へ戻り始めた。

「池で何してたんだ？」

「うむ。滝に打たれようかと思うてのう……」

池へ入り、水を媒体にしてどこかの滝に空間を繋げ、その先の滝で打たれようとしたのだが。

「どうにも雑念が多かったようじゃ」

「繋がらなかったのか」

童女のようにこくりとうなずいた真砂は

「滝の方からはじかれたようにも思う。……このような事態は久しぶりじゃ」

と素直にこぼし、縁側へ腰掛け踏み石の上で草履を脱いだ。

「いや、むしろ今だからだろ」

縁側を上がり障子を抜けると真砂の私室へ入る。

床の間に飾り棚までしつらえられた典型的な和室には文机といった基本的な調度品を除くと呆れるほど物が無く、持ち主を知らない人間は女子高生どころか思わず隠居の部屋かと勘違いをしてしまいそんな詫びしい有り様だった。

「……もつとも、そういう人間が真砂の部屋へ入れるわけがないのだが。」

ともあれすでに何度か訪れている孫（予定）にとっては目新しい物など何もないため、適当にくつろいでいるかと思いきや。

「……あれ」

「何じゃ」

突然上がった声に部屋の隅でお茶を淹れていた真砂は手を止め振り向いた。

「いや、掛け軸。床の間の」

「床の間かえ？」

何ぞそなたの目を引くような物があつたかのう、と首を傾げる真砂は孫（予定）の掛かつてるじゃねーか、という指摘にいぶかしみながら視線を向けると、

「……掛かつておるのう」

言外になぜじゃ、と困惑を深めながらいつの間にか変えられていた滝の絵の掛け軸にさらに首を傾げた。

日本画の題材として滝は珍しくなどないし、実際に何点も所有している。

ただ滝の雄大なイメージから掛けられるのは主に男性の部屋、あるいは客室に限られ、女性である真砂の部屋へ掛けられたことはこれまで一度として無かった。

「誰？ コレ掛けたの」

「心当たりはあるが……」

しかし……とさらに戸惑い続ける祖母へ、

「いや、むしろ今だからだろ」

と言い放ち、

「とりあえず祖母ちゃん、茶」

そろそろ渋くなる頃じゃねーの、と指摘をし、

「おお、そうであった」

祖母を戻らせた上でさらに背を向け、唇だけで言葉を続けた。

機が熟したな、と。

「祖母ちゃん、機が熟した」

思えばここまで長かった、と孫息子（予定）は嘆息した。

部屋の隅で急須から茶たくに乗せた来客用の湯飲み茶碗へお茶を注いでいる真砂の身長が今よりもたいぶ低かった頃から孫（予定）は真砂の元へ訪れていた。

ずっと。年数だけなら片手で足りてしまうものだったが、そう表現する他のない深い付き合いといえた。

まだあどけなさを残していた瞳が徐々に絶望へと染まっていく様子も、孤独を受け入れながらも狂気に染まることなく正気を保ち続けんと影で努力していた姿も、――遙か先の未来と同じく一族を愛し、守り、すでに文字通り己の全てを捧げていることも、ずっと見続けていた。

この過去からすれば遙か遠い未来に当たる自分がいた現代で、血縁なのに、いや血縁だからこそ自分とは異なる存在だと省みるなどなかった祖母のありのままを毎月「お客さん」として訪れることで孫（予定）は自分の人生の一部として追体験していた。

あなたがそんな真似をして、お祖母様が何とも思われないと本気で思っているのですか！？

要約するとそんな感じに糾弾した従姉妹もいた。今なら彼女の言葉も理解できるし、引き返すことだってできただろう。

だが。

「それでも、オレはオレの望む未来にしてみせる」

そう言い切ると、孫（予定）のお茶を置き空になったお盆を元の場所へ戻すべく立ち上がりかけた真砂の手首を掴み注意を向けさせると自分に最後に残った迷いを振り切るように真砂の目を見据え、断言した。

「祖母ちゃん、機が熟した」

約束だ。

叶えてくれと懇願し、同時に懇願された記憶が互いの脳裏によみがえる。

祖父ちゃんとは付き合わないでくれ。

今の祖父ちゃんの恋人と祖父ちゃんの仲を取り持つてくれ。

そしてオレを、オレの親父を未来に生まれさせないでくれ。頼む

よ――。

その己の全てを込めた言葉に真砂は当時と同じ眼差しと沈黙をもつて答えた。

是、と。

「ようこそ、孫息子殿。やっと会えたのう?」

その姿が見えるようになったのはいつの頃であつたか――。

制服が変わつた後だつたので中等部へ入つてすぐだつたかもしれないし、体に馴染んだ辺りかもしれない。あるいは2年に入つてからだろうか。

いずれにしても確かなことは3年に入る前であつたことと、その存在に気付く前から自分を喚んでいた声の持ち主であること。

わかつていたのはたった2点だけ。でもそれさえわかれば充分で、
ようやく危なげのない確かな姿を見られた存在へ、真砂は泰然と話しかけた。

「ようこそ、孫息子殿。やっと会えたのう?」

「……ああ」

だがその後、固い表情で自分を見つめていた孫（予定）は何と続けたのだろうか?

笑つて場を和ませようと試みたのか、言葉を続けて会話を成立させようとしたのか、あるいは――。

今更な話であるが、その後孫息子（予定）がどう続けたのか、真砂には全く思い出せないまま、記憶の中で孫（予定）の蒼白だった顔色と握りすぎて真っ白くなってしまつていた両の拳だけが焼き付いていた。

「誰のせいと思っておるのじゃ……」

一族の娘の元へは毎月一度、「お客さん」と呼んでいる存在がやってくる。

それは生き霊だったり幽霊だったり、妖怪だったり悪魔だったり。時には妖精などもありたりして、その人種（？）は様々だった。

けれど分類するとしたらその種類は二種類しかなく、対象である一族の娘が生前に「お客さん」の世話を受け、その代わりとして「お客さん」の面倒を見るか、あるいはきっぱりと生前に世話のみを受け、死後に「お客さん」の世話を焼き続けるか。突き詰めていけばこの二種類しかない。

そのため「お客さん」が血縁者である場合、兄弟や祖先――対象となる一族の娘より過去に人生を終えた人物ではあっても、弟妹、子供などという対象である一族の娘より未来を生きる存在はあり得なかった。――そのはずだった。だが。

「よう」

「……うむ」

まあ上がるがよい、そう許しを出した当の相手は飄々としたもので、珍しそうに室内を見回している。

何を隠そうこの相手こそが前述した「お客さん」であるのだが、しかしそうと認められない事情が真砂には――というより、真砂の周囲にはあった。

それはこの相手が間違いなく真砂の孫息子、つまり前例のない未来からの「お客さん」なのだ。

これを吉兆ととるか凶兆ととるかも含めて、一族の中はほぼ混乱状態にあった。

まあ正直真砂にとっては未来から来ようが前例がなかるうが、「お客さん」であることに代わりはないため、それなりに対処をして程良く付き合っていければ重上と思っていたのだが。

「ん？ 何だ祖母ちゃん、機嫌悪いな」

何もしないでいるのは気づまりだったのだろう、初対面の時の堅さを文字通りどこかへ追いやった孫息子（予定）はちよいちよいと床の間に飾ってあった花瓶へ活けた花の花びらだの枝だの葉だのを突つきながら聞いてきたものだから、マイペースっぷりには定評のある真砂といえども見逃せるわけはなく。

「誰のせいと思うておるのじゃ……」

などと相手が孫息子と判明してからこの方わずらわしいことこのうえなかつた真砂は思わず八つ当たりをぶつけてしまい、

「間違いなくオレだな」

とあっけなく交わされた挙げ句に某不思議の国の木の上の猫よろしくニヤつかれてしまい、外目には出さないながらも内心では大きく息を吐いていた。

閑話その3 「知らないよ、そんなの!!」 (前書き)

友達その2 しづか (でもこの時はまだ違うかも?)

閑話その3 「知らないよ、そんなの!!」

この国に慣れるため、まず可能な限り母国語を使つてはならない。そう堅く戒められた母親との約束を思わず破つてしまったが、大目に見てもらいたい。

しづかは授業前のお喋りに湧く室内を一瞬で静め、かつ教室中の視線を一身に浴びてしまっていることを感じ取つてはいたが、母国語の習得者が皆無であることを今はプラスに捉えて問題となるであろう部分だけに母国語を使用し、張本人の真砂へと問い返した。

「OK、真砂。もう一つ、聞く、まず、けど、niet o（西語：孫）が、何ですか？」

正直日本語に直すの面倒くさいなあ、西語が駄目なら英語でいいんじゃない？ 日本もグローバル社会になりつつあるってこないだ二ユースで言つてたしなあ、などとあれこれ現実逃避をしつつもどうかさっきの発言は日本語の能力が怪しい自分の聞き間違い、あるいは空耳であつて欲しいと神社、寺、はては自分の誕生日の守護聖人にまで祈りを立てていたが、これまでの人生経験の通り現実は今もってシビア極まりないもので、真砂の発言はさっきと全く変わつておらず。

「では繰り返すぞ。孫というものをそなたはどう思つておるかえ？」
……………こうして同じ質問を繰り返されるのだった。

そもそも転校生である自分の面倒を見るように担任の教師から頼まれたのは真砂ではない。真砂の友人のときだった。

なので真砂とはときこを通じて親しくなったのだが、しづかの日本語が怪しいことと真砂が寡黙……とまではいかないが、それほど喋らないことから自分とときこ真砂の三人でいる時は主に自分とときこが西和・和西辞典を挟んで喋る中でたまに真砂が言葉を漏らし、それを拾つたときこが真砂に答え、自分に説明するという流れ

だった。だから他のクラスメイトに用を頼まれたためにときこが去って行ってもものんびりと戻るのを待っていたし、その間に真砂は喋らないものと油断して、自分の西和辞典を閉じ、ついでのときこの西辞典も閉じさえた。

なのに。 - - ああ、それなのに!!

孫をどう思うのか、だって!?

「I don't know!!」

思わず最初に覚えた外国語だった英語を使いながら、今までときこが真砂の通訳のような真似をしていた理由と、 - - こんな珍妙な人間がいる国で本当にやっていけるのかと自分の将来について大いに疑念を抱き、かつ、転校以来最大級に教室内の耳目を掻き立てまくった瞬間だった。

閑話その3 「……そうではわね。まゝはきさんと話を伺うところから始めま

友人その1 ときこ

閑話その3 「……そうですね。まずはきちんと話を伺うことから始めま

その日学園へ登校してきて授業が始まるまで準備さえ整えておけば誰もがするように、ときも友人たちと話していた。

といっても主に話すのは最近できた友人のしづかだけで、もう1人の友人である真砂は会話に加わらずにいつもの通りのんびりと自分たちの会話を聞いていた――と思うには様子が違って見えたのだが、かといって自発的に話すところまではいつていないのだろう。

しづかの会話に相槌を打ちながら真砂の考えがまとまるであろう昼休みに水を向けてみようと思ったときは、後ろでしづかの会話が切れるのを待っていた委員長へ声を掛け、彼女の用事を聞くと一緒に付き合うことを快諾した。

いくら担任の教師に面倒を見るよう頼まれたのが自分だったとはいえ、いつまでも自分たちだけと付き合い続けるのはしづかのためにならないだろう。

同時にその誠実さからクラスの委員長に選ばれたもののどうしてもしづか込み思案な点が抜けずにいる、そしてその性格を変えたいと願っている委員長のためにも積極的なしづかとの仲を取り持つてみて互いに互いを刺激させよう、まずは委員長へ打診しなくては――そんな思惑から委員長の用事に付き合い、終わらせた後は朗らかに会話を弾ませながらその流れでしづかの元へ連れてこようとしていたのだが。

「何……でしょう、ねえ」

「本当に。どうなさったのかしら」

まだ先生が来ていないのに静まり返っていた教室へ委員長と共にいぶかしみながら入ってみると、そこには教室中の注目を浴びている真砂としづかの姿があり、ことにしづかがまるで世界の終末でも告げられたかのように頭を抱えていたことからときこは即座に状況を把握し、頭痛に悩まされそうな額を押さえた。

「あ、あのお、皆さん、どうなさったのでしょうか？」

しかしおろおろとつらたえる委員長の声に自分がこの騒動を収めなければならぬことを悟ったときこはできる限り冷静さを取り戻し、

「……そうですわね。まずはきちんと話を伺うことから始めましょうか」

おそらく真砂さんが原因なのでしょうけど、と苦笑いを浮かべながら委員長と共にほとんど衆人環視状態である二人の元へ寄って行った。

閑話その3 「孫だよね。子の子……って書いてあるけど」

・前編（前書）

友達その3 彼女

放課後、人の絶えた教室で学級日誌を記入し終わり日直の業務を終えた彼女は近付いてくる足音に顔を向け、驚いた。

足音の主は帰宅部であるためとうに帰っているはずの真砂だった。というのも、普段滑るようななめらかさで足を運ぶ真砂は歩く際に音を立てない。

そんな彼女が足音を立てる時は足音を聞かせる相手に話……というか、相談のある時に他ならないのだ。

よって彼女は真砂が自分に相談があることを察し、とりあえず隣の席の椅子を引いて、座るように声を掛けたのだが。

「……今、何て言ったの？」

座って間もなく、そなたにも聞いておこうと思うてのう、と前置いて真砂の口から出た言葉に驚愕した彼女はもう一度聞き返し、

「うむ。そなた、孫とはどのようなものと思うかえ？」

と繰り返されて、しばらく沈黙を保った結果、思わずそこら中に何か解決策が落ちてないかとうろろ視線を泳がせることとなった。

確かに彼女は普段聞き役に徹している真砂がたまに喋る時もあり、またその内容が喋った相手への相談であることを知っていた。

ただし物事には順序というものがある。この場合もまさしくそれで、真砂と仲の良い3人の中で自分の番がやって来るのは友人としての付き合いの長さからまずときこ、次がしづかで最後にやってくるものだった。

なおかつ真砂が彼女の元へ相談してくる頃にはすでに先の二人から彼女へ相談内容が事前に告げられてもいた。

しかし今回はそのときこからもしづかからも全く何も聞いていない。

突拍子もない質問がきたりするからまあ頑張つて……そう言つて肩を叩いたり、あるいはにこやかに微笑んでいた二人は両方とも帰

宅部のため、教室どころか学校を去っており、また、部活の代わりのごとく家の用事で飛び回っているため連絡がつく確率は非常に低かった。

かくいう自分もこの後に家の用事が控えているため、職員室へ日誌を提出したらすみやかに帰りたいかった。
どうする。

閑話その3 「孫だよ。子の子……って書いてあるけど」

・前編（後書

（文字数の都合で作者の携帯端末では編集ができなくなるため、前後にわけさせていただきました。申し訳ありません）

閑話その3 「孫だよね。子の子……って書いてあるけど」

・後編（前書）

友達その3 彼女

……どうする!?

そんな平静を保とうとしながらも思いつきり動転しまくっていた彼女を救ったのは、皮肉なことに自分の足で。

何と無意識の内に動かしていた足が机に当たり、床にこすれる音と机の中身が上下したことでゴトンという重い音が立ったことからひらめいた彼女は、追いつめられた状態にあったためあっさりそのひらめきにすがりつき、机の中から音の主の重い物を出して読み上げた。

「孫だよ。子の子……」って書いてあるけど」

とこのように机の中に置いていた国語辞典で「孫」を探し出し、引用して読み上げると、同時にこれだけでは真砂に対してあんまりだと思ったのか、同じく机に当たったことからカバン掛けに掛けていたため揺れていたカバンの外ポケットから携帯音楽プレイヤーを出し、仕草を出してかかんでもらった真砂の耳ヘイヤホンを掛け、なんでこんなにもかわいいのかと孫のかわいさを歌い上げる某さくらんぼ農家氏の歌を再生したのだった。

「……なるほど。こういうものかえ」

「……たぶん」

数日前に彼女のすぐ上の姉がイタズラで勝手にダウンロードし、プレイヤーへ入れたものだったが、とんだところで役に立ったものだ、と彼女は感心したため少し怒っていたものの許す気になったし、真砂は真砂でふんふんと最後まで聞いていた。

その後、真砂がその曲を購入したか、彼女の音楽プレイヤーにその曲がまた残っているかは定かではないが、聞き終わった真砂の顔がほころんでいたこと、彼女は彼女で真砂の様子からすぐ上の姉のイタズラを大目に見たため結局はうまく収まったようだった。

閑話その3 「孫だよね。子の子……って書いてあるけど」

・後編（後書

（文字数の都合で作者の携帯端末では編集ができなくなるため、前後にわけさせていただきました。申し訳ありません）

「うむ。仮面ヤイ。ーとアクシ。ン仮面のグッズじゃ」

十代に入る辺りを思春期とはよく言ったもので、重大ことから些細なことまで真砂が本当にあれこれ悩んでいる間に月日が過ぎた。

とりあえず手近なところではここでの馴染みである孫息子（予定）のことで、第一に（予定）が付いているとはいえ孫とはどう付き合っていけば良いのかという問いに大いに戸惑いつつも友人たちは答えた。

いわく、モノで釣れ、と。

よって最初に最初に聞いた答えである、

「コーラ、オレンジジュース、出す、OK？」という片言でも真意が伝わる友人の助言に従ってコーラとオレンジジュースを用意し出してみたところなぜか怒られた。

何故だろう。

それでは次と二番目に聞いた答えに従い、

「そうね、男の子なら電車の模型とかミニカーなら喜ばれると思いますわ」

百貨店の包装紙に包まれた品物を手渡してみたところ、今度は呆れられた。

さて、何が悪かったのやら。

傍目はともかく内心大いに首を傾げた真砂は考えた末、孫（予定）がモノに釣られるわけではない、すなわち友人たちの言う一般論の通用しない相手だと判断し、なるほど「お客さん」というのは難しい存在なのだな、と一族内での一族論にも納得した一方で、孫（予定）とは地道に関係を模索することに定め、じりじりと微妙ながらも付き合いを深め、最近では孫という名の宝物、とうなる歌声にうんうんと相づちを打つまでに至ったのだが。

真砂、16歳。

「……祖母ちゃん、何だよコレ」

「うむ。仮面ヤイ。ーとアクシ。ン仮面のグズズじゃ」

これなら喜ばれるに違いないと太鼓判を押されてのう、と誰に推されたのかご満悦な真砂に対し、だからそういう年代じゃないってずっと言ってたんだろー、と孫息子（予定）は肩を落として哀愁に浸って嘆いていたが、即座に叩き返していいないあたり、結構うまくいっているのかもしれない二人だった。

「うむ。仮面ヤイ。ーとアクション仮面のグッズじゃ」（後書き）

真砂さんからのお言葉

「本編では久方ぶりじゃのう。内容が元へ戻ったわけじゃが、さて、あれは何が気にいらなんだか……。やはり「お客さん」とは難しいもののじゃな。さて、次の更新も来週の土曜日を予定しておるが、どうなるであらうか……。作者も努めておるゆえ、来週も読みに来ていただけなからうか」

最後の煙が消え昇ると真砂は立つて窓を開けた。

「お客さん」である孫息子（予定）が向こうにとつては過去にあたるこの現代で時空を越えて姿を現すには身体よりしろの代わりである依代を立てる必要があつた。

といっても別段特殊な物など要らず、まるでその時の気分で……選んでいるふしも見られるが、ある時は屏風や掛け軸の絵から抜けだし、またある時は池の水面に浮かび出たり、またある時は庭の鉢植えの花を使つてみたりとその時々にある物を使つて現れていた。

今回の依代も似たようなもので、たまたま焚いていたお香の煙がふわりと広がつたと見るとまばたきをする間に孫息子（予定）が現れたのだ。

よつてお香が燃え尽きると共に孫息子（予定）も消え去り、同時にそれを察知した自分付きの使用人が現れることがわかつている真砂がお香のにおいが移らないよう先を制して窓をあけたわけだった。

「姫様」

ことに、障子越しといえども堅苦しい声を掛けてくるこの相手には。

「構わぬ。入りや」

そう言つて入室を促すと、入ってきたのは予想通りの人物だった。失礼致します、そう断りを入れて一礼をして進み寄る男はすでに真砂自身によつて片づけられた様子を見ると、はあ、と小さなため息を吐き、真砂の眉を見事に上げさせた。

「何じゃ。許す。申してみい」

言葉面だけ取れば一族の次期当主である真砂に対し発言を促すものだったが、声にとげが少し残っていたことと、先ほどとはうってかわつて顔がそつぽを向いていることから言外に、言えるものならのう、という態度が現れていた。

しかしこれで引くような人間ならそもそもため息など吐かないも
の。男はでは、と前置くとつらつらと苦言を呈した。

「良からう。ではそなたに宿題じゃ」

・前編（後書き）

（文字数の都合で作者の携帯端末では編集ができなくなるため、前後にわけさせていただきました。申し訳ありません）

「良かろう。ではそなたに宿題じゃ」

・後編

「では姫様に申し上げます。いかに御孫君といえど、かように便宜を図られ続けることはいかがでしょう」

日頃の無口、無表情ぶりはどこへやら。実に見事な小言っぷりである。

「恐れながら申し上げます、姫様におかれましてはまだまだお若うございます。いずれお迎えいたす婿君におかれましては同じことでしょう。ならば孫君におかれまして、かの君お一人である可能性は低いのでは？」

「そうじゃのう」

かつその内容的確さに真砂は苦笑をこぼすとわずかな間を置いてよけていた視線を男に戻し、提案をした。

「……そうであるうの。では良い。そなたに宿題じゃ」

そう言い放つところと年頃の娘らしい鈴を転がしたような声を上げ、真砂はじつと男を見詰めた。

「確かにそちの申す通りじゃ。遠き未来において、孫はあれ一人ではない。ならばなぜあれのため、多忙の中かくも少ない己の時間を割いておるのか。あれの願いを叶えんと一族の外でもあれこれ動くのか」

解けたらそなたの願いもきいてしんぜよう。のう？

その真砂の返し男は目を開くと、是とも非とも返事を残さずに去って行き、男の様子を見守っていた真砂はとろけるような笑みを浮かべてから、うつそりと窓から覗く月を見上げた。

「良からう。ではそなたに宿題じゃ」

・後編（後書き）

（文字数の都合で作者の携帯端末では編集ができなくなるため、前後にわけさせていただきました。申し訳ありません）

「あまのはら……」

ここは中国唐代の明州でも送別の宴席でもない。

現代の日本の、大きくも小さくもないありふれた県の外れにある人里離れた閑静な侘び住まいだ。

けれどあまりにも見事な月を前にふと興が差した真砂は扇を広げ、部屋の隅に置いた屏風へ向けて詠んでみせた。

「天の原……」

ふりさけ見れば春日なる、と上の句を告げると扇子が向けられた先の屏風の余白に下の句が浮かびあがる。

三笠の山に出でし月かも、と。

「当たり前じゃ」

そう応えた屏風に苦笑を滲ませると真砂は扇で顔を隠し、ゆつくりと瞼を閉じて思いを馳せた。

月が美しい夜は、二つに一つしかないと思う。

忘れられない相手を想うか、離れられない相手と過ごすか。

そんな戯れを仕掛けながら、幸福そうにまだ目立たない自分の腹部を撫でた女性がいた。

夫は誠実、生活は安定、出産も二度目となれば何を案じることがあるだろう？

彼女は自分の幸福を疑うことがなかった。

幸福とは自分の人生に堅固に築き上げられるもの。よもやそれが砂のように脆く崩れ去る時が来るなど思いもよらず。

……結果、産婦人科の医師ではなく、産婦人科医の資格を持った一族の巫女に、よりにもよって自分が人生において最も忌み嫌っていた巫女に、自分の腹の子がまさにその巫女として生まれることを告げられ、狂乱のまま、あれほど待ち望んでいた自分の子供がいる腹を叩き続け、打たれた鎮静剤によって眠りというつかの間の安ら

ぎに包まれるまでは……一度として、疑うことなどあり得なかつた。

おかあさんが、こわいことをさげんで、おなかをずっとたたいてた。

まだ幼い子供に聞くと、胎内にいた時の記憶を話すことがあるという。

真砂の場合も答えたそうだ。

おかあさんが、こわいことをさげんで、おなかをずっとたたいてた、と。

実際、真砂の妊娠中に母親はよく自分の腹を叩いていた。

狂ったような叫び声を上げながら、何度も、何度も。

周囲の人間が止めに入ると、自分の子を守って何が悪い、と顔色を変えて食ってかかったという。

これがいるから、自分の子供が授からなかったのだ、これを腹から追い出さなければ、正しい子供が宿せないのだ、と。

母親のこの言動を周囲は妊娠によるノイローゼと判断していたが、当の真砂にとっては真実だった。

母親にとって自分の子供とは真砂の兄をさすのであって真砂はそこに入らないこと、早く真砂を追い出せばそれだけ次の子供を宿し産むことができ、元の人生……真砂を妊娠する前の人生に、少なくとも真砂の母親にとっては戻ることができるのだと。

だから決してノイローゼでも何でもなく、……たとえ誰がどのような判断を下そうとも、真砂の母親と真砂にとってはそれが真実だった。

だから真砂は母親を愛した。

自分の出産によって歪んでしまった母親を。

そしてまだ若い頃に真砂の母方の祖父から援助を受けた政略結婚であるがため、真砂の母親と別れるわけにはいかずに結果妻同様真砂の兄と弟のみを自分の子と認め、真砂には目を瞑り背を向け続ける父親も。

すでに父親に支配され、逆らうなど思いもよらず、父親と同じよ

うに真砂から目をそむける兄も。

……そしてただ一人、家族の中で当たり前のように真砂の声を聞き、真砂の側へ寄る弟も。

真砂は確かに母親を愛し、同じように母親の愛する父親も、兄も、弟も、愛していた。

……あるいは愛する真砂の方が壊れているのかもしれないけれど。真砂は確かに……愛していた。

今でも時々思い出すことがある

今でも時々思い出すことがある。

「この……化け物!!」

髪を振り乱し、顔色を変え、大声で自分を罵る母の姿を。

「どうして……どうしてよ!!」

そう叫びながら冷水に浸かり、自分の腹を叩き続ける母の姿を。

「……まだわからないってみんな言うの。でもわたしにはわかるわこの子は絶対女の子。大事にするわ。だってずっと欲しかったのですもの」

かわいいかわいい私の子。

そしてとろけるような声色で、やさしく、愛おしげにふくらみのまだ無い腹部を撫でていた母の姿を。

……一体誰が、忘れられるというのか。

だから真砂は月の夜になると、……とりわけ、昔の母親が語ったような月が美しい夜は、母親の姿を偲ぶことにしている。

母の言う通りなら、月が美しい夜は忘れられない相手を想うものだから。

そして真砂の祖母が作った屏風も側に置いている。

一族の総領として生涯現役であり続けた祖母が多忙の中、和歌を好んだという娘時代の母のために作った和歌の上の句を問うと余白の部分に下の句が浮かびあがるという術を施した屏風を、離れられない相手……今は亡き母の姿を屏風に見立てて過すがごすことで、真砂なりに母の言ったことを守り、それによっていつかは母の望む娘になれるのではないかあえかな望めでもと縋すがりたかったから。

……あるいは、そうすることによって、自分さえ生まれてこなければ、という心の中の問いから逃げているだけなのかもしれないも。

「思い知る……」

人ありあけの世なりせば、そう言つて扇を向けると、余白でもつて屏風が応えた。

つきせず身をば恨みざらまし、と。

十六夜にも夜明けにもまだ早いとわかりながらも、真砂はこの歌を詠み、大きく息を吐いて……また、月を見上げた。

「……そうじゃな、お祖父さまのところへ泊まったのであった」

障子を通して差し込む光にまばたきを繰り返した真砂はゆっくりと目を開き、辺りを見回した。

視界に入る天井、布団と枕の感触、使用人たちが立てる支度の音、庭から伝わる緑のにおい。

五感の全てが告げる現在地に少し眉を寄せ、真砂は大きく息を吐いた。

「……そうじゃな、お祖父さまのところへ泊まったのであった」

そして真砂は身支度を整えるため起き上がり、夜着にしている浴衣の帯をほどいた。

さて、前にも触れたが真砂は一族の次期当主である。

となると当然一族の者が本来なら侍女の2、3人は付き従い世話を焼かれているところなのだが。

真砂付きの侍女は事情があつて側にはおらず、他の使用人を呼ぶとも式神などと呼び出そうとも思いもしない真砂は今日もちやつちやと身支度を自分で済ませるのだった。

中学まで通っていたのはいわゆる名門私立校だったため、これを明かすと友人以外は奇異の目で見られたものだが、現在通う高校は市立校のため当たり前なのが嬉しいところだ。

- - ただし、今度は現在のように室内のお香の香りが制服に移り、焚き染めたようになってしまつとお香に慣れていないせいか、こちらで奇異の目にさらされるのだが。

いずれにせよ全てにおいて自分を受け入れる場所などないことを理解している真砂は制服のブラウスのボタンを止め、スカートを穿きながら登校時に掛けられるであろう質問に備え、昨日焚いたお香の説明を頭の中でシミュレーションしていた。

多少煩わしさはあつても、声すら掛けられることのない孤独を身に染みて知っていたから。

「……それはどこであつた？」

祖父の家でのいつも通り、玄米ご飯とお漬け物と味噌汁の食事を済ませた後、同業者からの妨害――平たくいえば一族の次期当主である真砂への襲撃――を防ぐべく一族から与えられた運転手に送られ、学校の近くの通りで車を下りた瞬間立ちくらみがした、いや――。

世界が揺らいだ。

火に近づけたプラスチックのように全てが歪み狂い、溶けだして……世界が再構成されていく。

身を襲う激痛に耐えかね、うずくまった真砂は唇を噛み胸を押さえ耐えていた。

だが、波が引くように重圧が去り、視界も元に戻ったため、おそろおそろ顔を上げると、そこは出てきはずの祖父の家だった。

正確には真砂が食事を採る座敷だ。

現に目の前へ採ったはずの朝食がお膳の上に並んでいる。

ただ玄米だったはずのご飯が白飯に変わっていたためいぶかしんだ真砂が使用人を呼び出し聞いてみると、担当の者が運ぶ途中に転んだという。

「……それはどこであつた？」

思いのほか低い真砂の声に震えながら、使用人は答えた。

「ひ、姫様のお部屋の前でございます」

「そうか」

怯えさせてしまった使用人へ礼を言い戻らせると真砂は庭を臨み大きく息を吐いた。

落ち着いて見てみれば一度目の朝食の時間よりも遅くなっている。いつの間にか解けていた制服のリボンを握り、真砂は転んで、いや、転ばせてしまった使用人の名を呼び、詫びを入れた。

自分と孫（予定）の巻き添えをくらわせてしまった使用人の名前

を。

真砂が二度目の朝食に箸をつけるには、もう少し時間が必要だった。

「私用じゃ」

時間の流れに手を加えると反動が来る。

それは人命に関わる大きなことから小さな事故まで様々だ。

今のところ真砂に関わる者で時間の流れに干渉するのはあの孫息子（予定）だけであり、同時に反動が来るのも孫息子（予定）だけだ。

……正確にいうなら孫息子（予定）を見かねた真砂と本人の二人だけであつたが。

よつて世界の再構成に立ち会つというところでもない事態に立ち上つた時も孫息子（予定）の干渉による反動が来たのだな、と身体にかかる激痛の中で真砂は意識を保てたのだが。

「……どしたの」

その体、と登校した高校の教室でしかめ面の友人に開口一番唸るような低い声で問われた真砂は苦笑した。

日本舞踊の舞手であるしづかは芸術家ならではの直感で全てを見抜く時がある。

煙にもまけず嘘も通用しない相手であるため真砂は正直に話すことにした。

「私用じゃ」

「また？」

最近の真砂の無茶はほとんど「私用」が原因である。

一度決めたら何を言われても引きはしない。そんな真砂の性格を理解しても納得はしないしづかは嫌そうに眉を寄せると横を向いて大きく舌を打った。

「しづかさん」

お行儀が良くありませんわ、ともう一人の友人は柔らかくたしなめ、朝の挨拶を交わす。

「おはようございます、真砂さん」

「おはよう」

にこにこ微笑むときこはさりげなくしづかの隣の席に座る。

しづかが座る真砂の前の席も、ときこが座る真砂の斜め前の席も共にそれぞれの席の主は友人のところで話しているから空いてはいるが、真砂には仮に席の主が在席してもこの二人がこの席に陣取るであろうことがわかっていた。

それほどにこの二人は自分の無茶を怒り、諭し、何をしているのかを明かす気なのだと。

さらにいえばこの二人の歯止め役となれるもう一人の友人の友人は日直の仕事のため教室に戻っていなかった。

これは長くなるのう。

雲行きを悟った真砂は覚悟を決め、せめて傍目ぐらいは大人しそうに見えるよう、にこやかに微笑むのだった。

「うん？　なぜ皆は教室の隅へ寄っておるのじゃ」

日直の仕事を終えた彼女が教室へ戻って目を見張った理由は友人たちだった。

日本人形のように大人しそうで儚かなげな容貌とは裏腹に実は鉄火肌なしづかは気炎を上げているし、菩薩さまや観音さまのように常にアルカイツクスマイルで穏やかに微笑んでいるはずのときこは穏やかさをかなぐり捨てたか今にもひれ伏したくなるような迫力を隠しもしない。

クラスメイトが隅へ離れ遠巻きに怯えているこの状況を果たして理解しているのか？

――そう考えた瞬間、彼女は教室から飛び出したくなった。

どう考えてもこの状態を収めるのが自分以外にいないからだ。

現に周囲の人間からあちらへ行くよう押し出されていたらしい学級委員長から何ともいえない視線が自分に寄せられ、隣にいたはずの日直の相方も遠くへ離れて頷いている。

ああ、まったくもう。

自分を諦めさせるために大きな溜め息を吐くと、彼女は眼差しを上げ現場へと向かいだした。

前門のしづかに後門のときこ。

さてどこから話そうかと考えている内に真打ちが現れた。

「……まったくもう。三人揃って何してるの」

この中で一番付き合いが短いにも関わらず、全員が一番逆らえない友人である彼女だ。

「おお。日直の仕事は終わったのかえ」

「お陰様で。それで、マサちゃんは一切何をしたの？」

その呆れ果てた様子に全員の頭が冷える。周囲を見渡せば誰一人いない。

「うん？　なぜ皆は教室の隅へ寄っておるのじゃ」

「……何でだろうねえ」

力なく笑う彼女の様子に何かを察したしづかときこは勢いを落とし、

「……まあ、昼休みがあるからね」

「ね」

という囁きを残してさらに真砂の首を傾けさせるのだった。

晴れた日の中庭の芝生はお弁当組にとって最高の場所といえた。日差しが差し込むためあたたかく、校舎の間を縫って吹き抜けてくる風も爽やかで、あえて難点を上げるとその立地条件の良さからどうしても人目を引いてしまうことぐらいか。

けれどこの四人組……正確には彼女を除くしづかときこと真砂の三人だが……はまさにその三人が常に人目を引いていることから、どこにいても同じだろうということでも常にお昼は中庭で食べていた。にもかかわらずどうしても四人だけで話したいことがあったため、今日はいつもとは逆にめったに人が来ない旧校舎の裏庭で食べた。

「……さて」

「さて？」

重々しく箸を箸箱へ収め弁当箱の蓋を閉めるしづかを受け流しながら真砂も弁当包みの端を結んだ。

「話してもらおうじゃないのよ」

言うなりしづかは真砂へと膝を詰める。

裏庭は中庭と違って日が差し込まないため、こうして近付かれると影が入り妙な迫力が出る。

それを計算したのかしていないのか、強張らせた声でしづかは続けた。

「いい、真砂。誰にだって事情はある。それはわかってる。私たちは手足をばたつかせて駄々をこねて無理やりねじ曲げさせても許される年齢をとうに過ぎた」

そう言うとしづかは様子を見守っていたときこと彼女へ視線を向けた。

「彼女は家の手伝い、ときこは家業を継ぐため、二人とも放課後飛び回ってる。特にときこの方は家業に限らず勉強だったり習い事だ

ったり人脈作りのオツキアイだったり、色々」

真砂だつてときこの手帳がパンパンに膨れているのは知ってるでしょう？

収納の限界に日々挑戦し続けている哀れなときこの手帳を思い出して、真砂はこくりと頷いた。

自分も巫女という職業柄、結構な数の政財界の人間……の秘書が上司の予定の詰まった手帳を取り出す瞬間に居合わせはするが、ときほど膨れ上がった手帳を目にすることはそうない。

「あんた昔、ときこに何て言った？」

「……時間は確かに過ぎ去るものじゃが、かといってそなたから逃げ去っておるわけではない」

それはまだ彼女と出会う前、中学の頃に加減を知らなかったときこが勉強と習い事と家の手伝いとをがむしゃらにやり過ぎてふらふらになっていたのを見かねたしづかと真砂がいさめた時の台詞だった。

「同じことが今言えるんじゃないの？」

あんたに。

そう告げるしづかの唇は昔同様、への字に曲がっていた。

「……今あんた見てると、あの時のときこを思い出す」

顔色が悪い、気を抜くとすぐにへたり込みそう、食事は採るのが精一杯。

つらつらと挙げながら容赦なく真砂の様子を見据える。

「あの時は、昼間に出てきた幽霊みたいって言われましたわねえ」

そんな二人に頬に手を当てたときこが苦笑した。釣られたしづかは笑いながらも向ける視線は鋭い。

「で、私にはそんなあの時のときこより今あんたの方が余計やバい気がする」

「……やばい、かえ？」

「ああ」

おうむ返し of 真砂に対し、しづかはじつと真砂を見つめていた。

何一つ見逃しはしない。

そう語りそうなしづかの瞳は - - 本人が気付くことはないのだからうけれども - - 真砂でさえ見ることの出来ないものを見抜いていたのだろう。

「何つつか、うまく言えない。でも、あんたがここ最近打ち込んでいることって……」

あんたの寿命を削っている気がする。

迷いながらも断言したしづかに後ろの二人の表情が変わった。

「……頼む」

・前編（後書き）

（文字数の都合により作者の携帯端末では編集ができなくなるため、前後にわけさせていただきました。申し訳ありません）

命に関わるとまでは気づかなかったのだろう、互いに相手と視線を合わせるとそれを悟り、ときこは俯いて唇を噛み締め、彼女は能面のように表情を無くした。

そんな二人を案じながらもしづかがこの言葉を吐き出すのに背後の二人の視線を必要としたように、同じ理由から真砂はこの二人にこそ知られたくはなく、

「……真砂さん」

顔を上げたときこの張り詰めた声に真砂は大きく息を吐いた。

「今あなたがなさっていることはお家のことではないのですね」
ときこの目が真砂を見据える。

しばらく考えた末、

「今はのう」

と真砂はこくりと頷いた。

その言葉にときこの頬に朱がのぼり、

「それは、近々お家のことになるということですよ!？」

「その通りじゃ。じゃが」

一旦言葉を区切った真砂はときこの目を見つめて断言した。

「そなたにはどうすることもできぬ」

真砂はそう言つと、震わせていたときこの拳を包み込む。

「私に!？」

自分にはどうすることもできないその無念さを既に知っていたときこは激昂しかけ……

「……ときちゃんの力でも、どうにもならないのね」

静かな彼女の声に我を取り戻した。

「しづちゃんでも止めることができなくて、ときちゃんが自分の力と……ときちゃんの家の力を最終的に使っても絶対曲げられない。」

「……ううん、曲げたくないくらい」

本気なのね、と彼女にそう言い切られたため、

「その通りじゃ」

と頷いた真砂は指をつき、頭を下げた。

「……頼む」

見逃してほしいのじゃ。

そう頼み込んだ真砂に、三人の内の誰かが……あるいは全員だったのか、真砂に触れ、もういいと言うまで動かず、下げられ続けたままだった。

「……頼む」

・後編（後書き）

（文字数の都合により作者の携帯端末では編集ができなくなるため、前後にわけさせていただきました。申し訳ありません）

「――来やったか」

ぱち、という火がはぜる音をいぶかしみながら目をこらし、あたりを見渡すとそこは祖母の屋敷の庭だった。

といつても以前訪れたような祖母の部屋へ通じる奥庭ではなく、飛び石が始まる入り口だった。

電気による照明ではないいまつの炎に照らされた様子に嫌な予感を抱いたものの、この過去においては自分の昔を記憶も未来にあたることを頼みとして、孫息子（予定）は祖母の部屋へと歩き出した。

祖母の過去から自分の現在へと還った孫息子（予定）は仰天した。戻った先に従姉妹である孫娘（予定）がいたからだ。

思わずうめきたくなるのを押し殺し、余裕のある表情を取り繕いながら、孫息子（予定）は考えていた。

孫息子（予定）が祖母の「お客さん」として祖母の元へ遡る際は日時が判明していることから一族にはどうしても察知される。

すり抜けることなど到底叶わないため、孫息子（予定）はむしろ堂々と担当者にぶつかっているのだが、祖母の元から還る際は別だった。

自分の帰りを待つ存在など何もない。

多少時間軸がずれたところで自分以外の誰も困らない。……はずだった。よって今のように完全に油断していたのだが、目の前には自分を追う存在である従姉妹の孫娘（予定）がいて、目を見開いている。

時間の流れに還ったばかりの自分では話にならず、間違いなく捕まるだろう。

今、捕まるわけにはいかない。

とっさに脳裏で明滅したその考えに引きずられ、孫娘（予定）へ

「またな」

と告げると孫息子（予定）は再び祖母の元へ遡っていった。

「お客さん」が巫女の元へ訪れられるのは月に一度だけ。

その禁忌を犯すからには自分はもちろん祖母へも咎が及ぶことは理解していた。

よって孫息子（予定）の方でも

「……祖母ちゃん？」

といつになく低姿勢……というよりおそろおそろ祖母の部屋へと入って行ったのだが。

「……来やったか」

見る者全てを凍りつかせるような微笑みを浮かべた祖母の前に、予感が当たったことを悟り、大人しく頭を下げた。

「そこに座りや」

眼前の祖母は16歳だった。

まだ制服を着て学校へ通う高校生だ。

にもかかわらず高校生の祖母の姿にありし日の厳然としていた祖母の姿が重なって、

「そこに座りや」

という静かながらも怒りに満ちている声に孫息子（予定）はおののいた。

ただ恐ろしくて、恐ろしくて――少年時代のわずかな間といえど祖母の元へ預けられたことから月日が過ち大人になっても――この声は恐ろしかった。

歯を噛み締める音さえはつきり聞こえてしまうような静寂の中、扇を開く音と閉じる音が交差する。

それは一族の当主であることから日頃感情を抑える祖母がそれでも激怒した時に出る癖であったため、頭の中で一度、二度、三度と数えると、続くであろう叱責に孫息子（予定）は身構えた。

一族の巫女は一族を愛する。

それはどれほど崇められたとしても異能者である巫女は一族の他に居場所など無いからとされているが、事実は違った。

ただ、愛するのだ。傍から見れば愚かなまでにひたむきに。理屈ではなく。

だから真砂は孫息子（予定）の願いをききいれ――。

「先頃そなたが起こした無茶により一族の者が巻き込まれた」
全てそなたとそなたの無茶をきき入れた自分のせいじゃ。

真砂は怒りに震えながら、自分と孫息子（予定）を断罪した。

孫息子（予定）は真砂から見れば直系に当たる。

かといって一族の次期当主として公平を旨とする真砂が孫息子（

予定）を選び傾くことなどありえなかった。

特に、非が孫息子（予定）にある場合は断じて。

それをよく知る孫息子（予定）は頭を下げ続けることで真砂の怒りを受け止めていたが、ふと視界に入った色に頭を上げ、口を開いた。

「・・・その花」

「うん？」

「……その人が活けたのですね」

孫息子（予定）の指摘に真砂は莞爾かんじと笑った。

真砂の部屋は使用人により常に花が活けられている。

側に付く者こそ実質定められてはいないものの、使用人の中で段を持つ人間の技巧を凝らした作品がかわるがわる部屋を彩っていたけれど今孫息子（予定）が指した花は明らかに素人が活けたもので……。

「なるほど。そういうことですか」

自分たちの事情に巻き込んだことの償いとして真砂がその一族の者を自分に付けたことを察した孫息子（予定）は、

「よくわかりました。では、僕に何をせよと？」

と真砂へ問うと、真砂は笑みを浮かべたまま孫息子（予定）の額をさし、続いて自分の腹部もさして見せた。

「……馬鹿め。いかに難があろうとも、そなたを切ることなどありえぬわ」

その少女へ奇異の目を向ける者は多かった。

一族の血を引き一族の有する土地に建てられた少女の屋敷に仕えながらも、彼らにとって少女の存在は異質だった。

何より平日は親元で暮らし、週末と祝日のみ屋敷に滞在する少女が平日にもかかわらずなぜ一族の仕事でもないのに居続けているのか。

しいて理由を挙げるなら先頃長く空いていた少女の元に付く人間が実質的に決まったことにあるのだろうが……。

「……というのがこの家を含めた大体の意見ですがね。どうです」結構いい線を出ているでしょう？

と笑いながら話しかけてきたのは一族が真砂に付けている側近だった。

――正確には次期当主への側近であり、真砂本人の側近とはお世辞にもいえなかったのだが。

「ではそなたも世話役の娘のようにそなたを追い出さんがため、あの者を側へ置いたとでも？」

真砂は真砂でわざと世話係に似せたうすら笑いを浮かべて挑発的に言葉を返すや、

「……馬鹿め。いかに難があろうとも、そなたを切ることなどありえぬわ」

ばっさりと切り捨てた。

「……馬鹿め。いかに難があろうとも、そなたを切ることなどありえぬわ」

（文字数の都合により作者の携帯端末では編集ができなくなるため、前後にわけさせていただきました。申し訳ありません）

「……馬鹿め。いかに難があるとしても、そなたを切ることなどありえぬわ」

一族の当主となる真砂にとっていずれ障害になる者を挙げるとすれば、この男以外なかった。

靈力こそ無いものの、血筋は濃く実務能力において右に出る者が無い。

だからこそ真砂も側近として側に置くことに承諾し、男の手腕を利用しつつも監視を続け、同時に男の方でも真砂の血筋と靈力を利用し自身の評判を上げながら、既に男の駒である世話役の娘を通して気を抜くことなく真砂を見張り続けていた。

「表の企業経営においても一族内の方針においても全てお祖母さまの時代のままじゃ。いかにお祖父さまが有能である上に巫女たちが支え続けようと、このままではいずれ取り残され、消えてしまう」
眉間の皺を深くしながら真砂は自分の側近を見据えた。

「世代を代える時が来たのじゃ。巫女だけでなく、巫女を補佐する一族も、表へ出る企業の者も」

「それが私だと？」

そうひそやかに囁きかける男へ、

「……たわけが」

と真砂は冷ややかな視線を投げつけた。

「己の他に誰もいやらぬと思うていように、ようもぬけぬけと言いやったな」

二人の他に誰か居るなら取り成さずにはいられない酷評ぶりである。

しかしこの場には二人しかない。

「それはそれ、これはこれですよ」

よって側近の方も地を現し、態度を本来の姿に戻した。

男の眼がゆつくりと細まる。

「これまで肃々と周囲の言うことを聞いていたあなたがとうとう自

分の意思を表したんだ。あなたが考えるほど小さな話じゃない」
今はまだ小さなものですがね、と前置くと、真砂への要求を残し、男は去って行った。

その日は遅くまで扇を手に加え込む真砂の姿が見られていた。

しかしその表情が何を意味していたのか、彫像のようにたたずみながら何を考えていたのか。

真砂の真意を明かされた者は一人としていなかった。

「……馬鹿め。いかに難があろうとも、そなたを切ることなどありえぬわ」

（文字数の都合により作者の携帯端末では編集ができなくなるため、前後にわけさせていただきました。申し訳ありません）

「今少し待ちや」

週末に入ると学校へ一族からの送迎車が寄せられる。

正門前に着けられると面倒なためさすがに裏門へと頼んでいるが、「自由」を許された学生から祖父の権力による庇護を受ける代償ともいえる「束縛」を受ける巫女へと変わる、恒例ながらも少し気の重い、真砂にとっては普段と変わらない光景だった。

しかし門内から真砂の屋敷の玄関へと着けられる中で磨き抜かれた車窓が写すように、真砂の目をみはらせる人間が出迎える使用人の中に混じっていた。

「お帰りなさいませ、姫様」

「……うむ」

平淡な声が重なる中、聞き覚えのある声が耳に飛び込む。

その硬質な響きにややたじろぎながらも、この人間以外には平靜に見えるよう外面を保ち続け、真砂は屋敷の中へ入った。

廊下を抜け、座敷の前を通り、自室へ入れば間を置くこともなくお茶を持った自分付きの使用人……と代わったあの男が真面目な顔をしてやって来るのだらう。

何かしらの苦言を呈しに。

それは先日自分付きの使用人を自分で決めたことなのか、あるいは自分の側近とは名ばかりの腹の内が知れないあの男と接触を持ち要求をきき入れたことにあるのか。

心当たりをぽつぽつ挙げるが、いずれにせよ後ろめたい。

大きいため息を吐き、顔をしかめた真砂は時間を稼ぐべく、先に制服から着替えることにした。

この屋敷では普段着を和服と定められているため、着替えの用意を済ませるとまずブレザーのスカートを脱ぎ、ハンガーにかけ、リボンをはずし、ブラウスのボタンに手をかけたところで予想通りの人間が例のごとく声を掛けてきた。

「姫様。お茶をお持ちいたしました」

まさに計算通りである。

ゆっくりと脱ぎ進めていて良かった、と姫様と呼ばれる割には姑息な手段を弄した真砂が内心しめしめと思いながら、

「今少し待ちや」

とわざとらしく返事をする、ふすま越しとはいえ察したのだろう、失礼いたしましたという謝罪の声を後に気配が少しずつ遠のいていった。

これで少し猶予ができたわけだ。

作戦成功とばかりににやりとほくそ笑むと真砂は止めていた手を進め、ブラウスと下着を脱ぎ、お気に入り着の襦袢へ袖を通した。

「では聞こう。そなたの答えを」

昔から、梅の柄が入った物を側に置くとなぜか落ちついた。

だからだろう、自分の中でここぞと思った時は何かしら梅の柄が付く物を側に置いていた。

それは大事な物を入れる手箱だったり、大事な手紙をしたためる時の硯すずりであつたり、場合によってさまざまだったが、今日は服に表していた。

足袋も梅、半幅襟も梅、帯も梅なら帯留めも梅。

さすがに時期が外れているためお香こそ梅の香りを避けているが、突っ込み属性の友人がここにいたならまぎれもなく

「正月かよ!？」

という突っ込みが裏手と共に炸裂するだろう。

「……ありえそうじゃのう」

頭の中に想像をした真砂は思わずくりと笑いながら髪を整え、仕上げにかんざしを挿したところで再び声が掛かった。

「――姫様」

「入りや」

入室の許可を出しながら鏡台へ覆いを掛ける。

それはわずかな時間だった。

だが、

「失礼いたします」

とうやうやしく作法通りにお茶を運ぶ男が見たのも、覆いにより閉ざされる鏡台が最後に写していたのも、友人の姿を思い描く少女ではない、一族の次期当主である総領姫の姿だった。

男の淹れたお茶は完璧だった。

これならいつでも役員付きの秘書として採用できるだろう、と平静な表情の裏で真砂は思った。

経歴こそ側近には及ばないが、それはひとえに向こうが華々しく

功績を上げるのに対し、正反対なこの男が地味な仕事ばかりこなしているからではない。

まあ側近と同じように活躍するなどこの男には思いも寄らないだろうし、何より側近の方で潰しにかかるだろう。

互いに目障りに思っているのは明白なため、いつかは対峙する日がこようが、それを早めるつもりのない真砂は思うにとどめ、口では正反対のことを告げた。

「さて。そなたが参ったのは先に出した宿題のことかえ」

案の定、男は是と答えを返し、真砂の目を光らせた。

「さようにございます。――姫様」

「何じゃ」

「この答えが正しければ、私を側に置かれますね」

「――無論じゃ」

不満かえ？ と当然のように聞き返す真砂に対し、男の顔にも凄みが混じった。

一族の中で実力はあってもあえて二番手に甘んじてきた男へ本当に二番手となり自分と、ひいては一番手である側近への服従を誓わせる。

真砂が求めた宿題とは男を図るものであり、同時に男が出す答えも当主としての真砂を図るものであったため、当然のことではあったのだが――。

「いえ。一族の当主として立たれる御方ならば当然でございます」

そう平然と言い切った男は自分の答えを告げ、真砂の目つきをやわらげると同時に、

「馬鹿な奴め」

とひそやかに苦いたため息を吐かせることになった。

こうして後に真砂の右腕と称され、同時に側近中の側近として恐れられた男が真砂の元へ下ったのだが……………それが真砂の言うよう男にとって「馬鹿な」ことになるかどうかは、本人以上に真砂へ

か
か
っ
て
い
た。
。

「では聞こう。そなたの答えを」(後書き)

孫息子(予定)からのお言葉

「うーわー、まだ続いているし。……てかオレ、この後登場予定だったんですけど？ この長さでよく先々週登場予定だなんて予告出せたよなー。……まあ、今に始まったことじゃないんで、来週も更新予定だからさ、土曜に見捨てず読みにきてくれ。な？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6754s/>

[連載挑戦作品] 勝負はこれから……？

2011年11月18日03時14分発行